

20024

経カテーテル心房中隔欠損閉鎖術における課題

¹医療法人社団誠馨会 新東京病院、²医療法人社団誠馨会 新東京病院

古梶 有紀¹、湯浅 雪¹、渡辺 朋美¹、成川 一二美¹、長沼 亨²

【背景】当院では2015年10月より経カテーテル心房中隔欠損閉鎖術（以下ASO）が始まり、現在までに12症例施行されている。当施設でのカテーテル治療は局所麻酔が必要であればセデーションを併用して施行される。ASOは治療時に経食道エコーが必須となるため、全身麻酔下で施行されるが、全身麻酔下での待機的カテーテル治療は稀である。ASO症例を振り返ることで課題が示唆されたため報告する。【方法】2015年10月～2016年5月までにASOを施行した12症例を後ろ向き調査【結果・考察】12症例中、カテーテル室入室後全身麻酔導入までに不安を表出した患者はいなかった。しかし入室から麻酔導入までの時間は平均9.1分と短時間であり、治療直前の患者が不安や緊張を表出できる環境とは言えない。全身麻酔での治療により、治療中に訴えられない患者の要望を事前に把握することは重要と考える。ASOは麻酔時間 中央値72分、手技時間 中央値45.5分であった。この中で看護業務は全身麻酔介助や治療の介助、記録など多岐にわたり、患者への看護について改善の余地がある。治療中の看護を評価することは、今後ASO時の看護の質の向上に繋がる。これらのことから術前術後に患者を訪問することは有意義なことと考える。【結語】症例を振り返る事で、全身麻酔下で施行されるASOにおいて、看護の見直しが必要であり、看護の評価のために術前術後訪問を導入する事が課題である。